
ベン・トー ～狩人の名を持つ狼～

?ハッピー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベン・トー 〜狩人の名を持つ狼〜

【Nコード】

N7340Z

【作者名】

?ハッピー

【あらすじ】

「俺は狼だ、最悪の二つ名を持つ」とある理由により転校することになった主人公烏丸 翔太が昔小学生のころ同級生だった佐藤 洋と再会し普通の日常を過ごすつもりだった。アイツがあのスーパ―に来るまでは。

原作にどつりに話を進めていくつもりですがなにせ自分に文才が無い為自己満足の小説になるかもしれませんがもし暇であれば見てください。

プロローグ（前書き）

ベン・トーの小説を書いて見ましたが1巻を友達に貸しているので更新は、出来ませんがうる覚えの感じになるかもしれませんがこのところは了承下さい。

それではプロローグをお楽しみ下さい。

ブローグ

町のどこにでもある小さなスーパーそこで今夜も戦いが始まろうと
していた。

ここは西区のホーキーマートというスーパー
そこにはものすごい威圧間を感じた。

「今日は氷結の魔女はいないのか。せつかくよく来るスーパーを調
べて来たのに。今日は帰るかなでもおもしろそうな奴もいるし残る
か」

そんなことをいっていると、このスーパーの半額神ことアブラ神が
扉を開け出てきた。

「いよいよ始まるのか半額印証時刻。さて、この西区の実力見せて
もらおうか」

俺は、胸のドキドキが止まらない。
ものすごい個性的な人たちがいるからおもしろそうだ。
アブラ神が半額シールを張り終わる。
そしてこっちをちらりと見た後静かに扉を閉めた。

「さあ狩りの時間だ」

その瞬間、狼と呼ばれる者たちが弁当に向かい飛びつく。
弁当を争う壮絶な戦いが始まった。
俺は、遠くで見えているだけだった。

「この中に二つ名持ちは誰もいないな、なら楽勝だな」

そう俺が言つと狼たちは一旦戦いをやめて俺に、ものすごい顔で顎髭を生やした男が言つてきた。

「なんだよ、お前はこの辺ではみない顔だなあ」

「そりゃそうだよ、俺は最近このあたりに引つ越してきたんですから」

「まあいいとりあえず俺が実力を見てやるよ」

「俺に叶うと思つてるんですかあなたが」

「なにを！！」

そついうと俺に向かい飛び掛つてきた。

俺はそれを普通にかわすとなんか分からんがその顎髭を生やした男が切れていた。

「もう怒つたぞ、ココからは本気だ」

さつきまで本気じゃなかったのかよ。

「かかつてきてくださいよ。狼さんよ」

相手は俺に向かい殴りかかつてくる。俺はそれをかわすと顎髭に向かい蹴りを入れる。

蹴りをいれるとその男はうめき声を上げながら倒れていった。

「あれこなけかよ」

そついうと他の狼が俺をなんか変な目で見ている。もしかしてアウエイ。

「どうしたんですか。かかつてきてくださいよ」

「行つてやろつじやないか！！」

「そつこなくちゃ。楽しい狩りの時間だ」

「おっしやー弁当は取ったし帰るか」

俺が帰ろうとすると、さつき威勢が良かった茶髪で髪が長めの女性
が俺に話しかけてきた。

「あなたは誰なの？この地区の人間ではない。しかもただの狼にし
ては、強すぎるほんとにあなたは何者」

「俺か、俺は烏田高校一年（仮）最近引越してきた名前は烏丸
翔太だけだ」

「烏田高校？ってことはわんこと一緒に私と一緒に
わんこ一体誰のことだ。」

「烏田高校だったんですか、多分先輩ですよ。それじゃあ氷結の
魔女こと檜水 仙を知っていますよね。それじゃあ伝えてください、
俺のことを」

「一樣伝えておくけどあなたどう伝えればいいの？」

「そうだな、この名前は気に入ってるわけじゃないんだけどなまあ
しょうがない」

俺この名前嫌いなんだよな。まあいいか

「それじゃあいいですよ。俺の二つ名を俺の二つ名は です」
その名をいうと茶髪はものすごく驚いていた。

「まさかあなたがあの二つ名の持ち主」

やっぱり驚いているだからこの二つ名はキライだ。

「ちゃんと伝えといてくださいよ。先輩」
そういつて俺は店から出ていった。

俺の二つ名それは狼殺しの意味の「狼殺し ウルフスレイヤー」
それが俺の二つ名である。この二つ名は俺は嫌いだ、なぜならこの
名を聞くと皆が口をそろえて逃げていくからだ。

プロローグ（後書き）

どうでしたでしょうか、面白かった人はコメントを下さい。

キャラ設定（前書き）

今回は主人公である烏丸 翔太のプロフィール紹介です。

キャラ設定

名前：烏丸 翔太

二つ名：『狼殺し ウルフスレイヤー』

容姿：髪の色が立っていて基本的な主人公の髪型で普段は、ぼーっ
としている。基本的にイケメンである。

性格：弁当争奪戦の時はまた違った表情をする。大体こわめの顔をする。性格はとても優しく誰とでも友達になれる感じの性格である。この性格ゆえに自分の大切な人が危険に去らされると我を忘れて怒ることもある。そうになったら誰も止められない。

家族：家族は父は行くえい不明 母は交通事故で死亡こんな感じのため今は、弟と妹で家に住んでいる。弁当を求めるわけは、弟と妹の為。

交友関係：佐藤 洋 著我あやめとは昔よく遊んだ。

二つ名の由来：今のところは不明

戦闘スタイル：基本的に拳と足を使った戦い方だが他にも割り箸、カゴ、カート、輪ゴムなどスーパ―にあるものをほとんど使い戦う場合もある。

好きなもの：妹と弟 仲間

嫌いなもの：仲間を傷つける人

決め台詞 口癖：「さあ狩りの時間だ」

キャラ設定（後書き）

設定はまた増えるかもしれませんが。そこんと頃は了承下さい。

第1話 友との再会（前書き）

今回は佐藤との再会あたりをやります。

第1話 友との再会

俺はめんどくさかった。学校に行くのが。

「めんどくせえな。学校」

なぜこんな面んどくさがっているかと言うと。

俺は転校生である。学校に行くと職員室に行く あいさつ 教室に行く 自己紹介 ざわざわ 放課になる 質問責めにあう（個々が一番面倒だ）というわけで俺は学校に行きたくない。

職員室へのあいさつを済ませた俺は教室に向かう。

「まさかこんな次期転校生なんてねえ」

「はい、いろいろ事情があって」

こういうことがあるから面んどくさいんだよ。と心の中で思いながら俺は笑っていた。

俺は教室の前についた。

「ちょっと待つてなさい。合図を出したら入ってきて」

「わかりました」

そのぐらいもうなれてるんだよ。と心の中で思いながら俺は笑った。

「はい、静かにしろ今日は転校生がいるぞ」

「まじか！女か男か」

「男だ」

「なんだよ男かよ」

わるかったな男だよ。

ちよと俺は切れかけていた。

「それでは、呼ぶぞ、入って来い」

俺は扉を開けてちよっとドキドキしながら入って行って教卓あたり

で止まり自己紹介をした。

「はじめまして。このたび転校してきました、烏丸 翔太です。よろしく願います」

俺の自己紹介が終わると女子が騒ぎ始めた。

「きゃーーーー」

「イケメンだよー!」

「滅茶苦茶かつこいいじゃんか」

いくどとなく転校してきたが俺が入ると大体この反応だ。

俺はあきれながら教室を見渡すと見たことある顔があった。

相手もこっちにきずいた様だ。

「まさか!」

「まさか!」

「洋!」

「翔太!」

俺とそいつは同時にお互いの名前を呼び合った。

「何だ佐藤と知り合いなのか。それじゃあ佐藤お前が面倒見てやれ」

「僕ですか?」

「先生大丈夫です。あんなバカに見てもらわなくても」

「バカとはなんだバカとは」

俺と洋はにらみあった。その後なぜか

「はははは」と二人同時に笑いあった。

「変わらないな、今も昔も」

「ああそうだな」

「そんなこといってないで授業始めるぞ」

「はーーーーい」

放課中

「ねえ烏丸君は、何所から来たの」

「どんな食べ物が好き」

「どんな人がタイプ」
また始まったよ質問責め。いつもこうだ。
あーめんどくせ

放課後

「洋どこいくんだよ？」

俺は、洋を追いかけた。

「何所って部活だよ」

「お前部活やってたのかよ！」

「まあね部活といえるか危ういけど」

「どんな部活だよ？」

「まあこれば分かるよ、一緒に来る」

「暇だし行くか」

俺は、洋についていくとちっちゃめの部屋の扉の前に来た。

「ここか？」

「うん」

洋が扉を開けると女性の声がした。

「何だ佐藤今日は早いな。そっちは誰だ」

その女性は俺が会いたい人だった。

「こいつは、今日転校してきて僕の小学時代の同級生の」

「烏丸 翔太です。よろしくお願いします」

「ああよろしくな。私は檜水 仙だ」

俺の胸は高鳴り鼓動を隠せないくらいになっていた。

「やっとあえたあなたに」

俺が小さい声で言うと言洋が

「どうかした翔太」

「なんでもないよ、でこの部活何する部活なの」

そついうと氷結あ間違えた檜水先輩が

「この部は半額弁当を取る部だ」

「へえー面白そうですね、俺入部します」

すると洋が

「止めといた方がいいよ。この部、危険だから」

「大丈夫だよ、ところで槍水先輩」

「何だ、烏丸？」

「今日俺とスーパーで戦ってくれませんか」

その言葉に洋が驚いていた。

「別にいいが基本、部の中では戦わないのだが」

「そうだよ翔太やめときなつて槍水先輩は強いよ」

「分かっている。でも俺も気に入っていないが二つ名を持つものだ戦いを申し込むのが当たり前だろ」

俺のその言葉に洋と槍水先輩は一瞬止まった。

「どうということ翔太が二つ名持ちって」

「まあそこは気にするな」

「それで烏丸お前の二つ名は？」

「はあ出来るだけいいたくないんですけど、それとこの二つ名でよばないでくださいねえ」

俺は一回大きく深呼吸をした。

「いきますよ俺の二つ名は『狼殺し ウルフスレイヤー』ですよ」

その瞬間、槍水先輩は啞然とした顔をしていた。

「お前が『ウルフスレイヤー』だったのか」

「それじゃあ今日スーパーときわで待ってますから」

俺はその言葉を言い去っていった。

「楽しみだぜ、氷結の魔女お前の二つ名伊達じゃないとこ見せてくれよ」

第1話 友との再会（後書き）

なんかどんどん翔太がキャラ崩壊しています。
ちなみに時間列は、2かん

第2話 誇りを賭けた戦い（前書き）

ついに始まる氷結の魔女対ウルフスレイヤー勝つのはどっちでしょうね。

それでは第2話 誇りを賭けた戦いどうぞ。

第2話 誇りを賭けた戦い

俺は、閉店前のスーパースーパーときわに来了。

「ついにあの氷結の魔女と戦えるのか」

俺はそんなことを言いながら、棚の中の新商品のお菓子を見ていた。するとスーパーの扉が開きそこには俺の待っていた人が来た。

「来ましたね、槍水先輩いや、氷結の魔女！」

「ああ約束どうり来たぞ」

俺らが話していると聞き覚えのある声が

「洋！お前も来たのかよ！」

「なんだよ、俺が来ちゃ悪いのかよ」

「別に悪いわけじゃないが怪我するぞ」

そんなことを話しているともう一人洋の後ろに誰がいる。隠れているのか。

「ほら著莪ひさしぶりの再会なんだから」

そういうと洋は金髪の俺が良く知る女性を連れてきた。

「あやめ？もしかしてあやめじゃねえか！！」

そんなことをいうとあやめは俺に向かい抱きついてきた。

「いままで何所行ってたんだよ。小学生の時もさよならも言わずにどっか行くしと思ったらいきなり帰ってくるし。このバカ、バカバカバカ」

とあやめは半泣きで俺に言ってきた。

「その説は悪かったてもお前いい女になったな」

「うるせえ、バカ」

正直今のあやめはものすごくかわいい。

「感動の再会はさておき、もうそろそろ半値印証時刻時間だ」

「そうだな」

その言葉からちょっと時間が経つとこのスーパーの半額神ことじじ様現れた。

「ついに来ましたか半額神様」

「佐藤おまへは何を狙う」

「僕ですか僕は天井を」

「そうか私は季節の野菜炒め弁当を」

「私はから揚げ弁当を」

「俺はなんでもいいやとれるもんをとる。ただそれだけだ」

なんかいま自分でもかっこいいこといった。そう思わない洋と振り返ってみると洋は聞いてなかった。

アブラ神がシールを貼り終わるとやはりこちらをちらりと見た後扉を閉めた。

その瞬間いつせいにお腹をすかせた狼達が弁当に群がる。

それじゃあいつもの決め台詞言いますか。

「さあ狩りの時間だ」

俺はちよつと遅れて弁当の元へ行く。

普通に行けば俺は楽々弁当を取れるだが今日の目的は氷結の魔女との手合わせだから俺は氷結の魔女の元へ向かう。

「それでは氷結の魔女さん、お相手よろしく願いします」

「来い！！」

「それじゃあいきますよ」

俺はそういうと氷結の魔女に拳を仕掛ける。

その攻撃を氷結の魔女は空中に跳び回避した。

「やりますね！」

「今度はこちら行くぞ」

そういうと氷結の魔女は俺に向かい足技を繰り出してくる。

その攻撃を俺はかわすと後ろから名もなき狼が来る。

「邪魔なんだよ、俺と魔女の戦いの邪魔をするな！」

俺はそういうとそこらにあったカゴを手に取りそのカゴで相手を叩いた。

その後男は動かなくなった。

「それじゃあ戦いの続きをするか。魔女！」

「ああそうだな」

俺はカゴを床に置き魔女に向かい攻撃を仕掛ける。

その攻撃はあつたが魔女はびくともしない。

「すごいじゃないですか。俺の攻撃を受けて平気とは」

そういうと魔女は「まあな」といい俺に攻撃を仕掛ける。

俺はそれをさつき床に置いたカゴをバネとし空中へ移動。

俺はそのまま魔女に向かい蹴りを入れた。

その蹴りは、魔女にかすった。

「やるなあ」

「そつちこそ」

そうお互いに強さを確かめると俺は満足し魔女との戦いをやめ弁当をとることに専念した。

「はー弁当も取ったしさて帰りますか」

「まて」という声がし振りがえるとそこには魔女と洋とあやめがいた。

「いつしよに部室で食べないか？」

「その誘いは受けたいんですが家でお腹をすかせた兄弟が待っているので今日はパスで」

「そうか、わかったじゃあなまた明日」

「ハイまた明日部室で会いましょう」

そういいおれは去っていくと帰り際、魔女が

「お前との戦いおもしろかったぞ」

「僕もです」

そうして俺はこの場から立ち去った。

第2話 誇りを賭けた戦い（後書き）

次回予告

次回予告をまかされた烏丸 翔太です。

いやー氷結の魔女ほんとに強かったな、次回も戦えるといいんだけどまあ次回はあの女と戦います。まさかのあの女が二つ名持ちとはな

次回：湖の麗人

それじゃあ決め台詞でしめますか。

「さあ狩りの時間だ」

第3話 湖の麗人（前書き）

今回は湖の麗人との戦いです。
それでは、第3話 湖の麗人どうぞ。

第3話 湖の麗人

氷結の魔女戦の次の日

「んんん・ん」

俺は起床し時計を見ると針は昼をしめす。12時を指していた。

「はぁぁー。えらい寝てたなぁ」

今日は特にやる事もないしなぁ。

「散歩でも行くか」

俺は、服装を烏田高校の制服に着替え（何となく）携帯と財布を持つて外へ出た。

特に行くあてもなくブラブラと散歩していると携帯がなった。

ブルルル

「一体誰だよ？洋何だアイツからか」

そして俺は電話に出た。

「はいもしもし洋どうしたんだよ？」

洋はあわてた口調で「大至急、丸富大学へ来て」

「それってあやめがいる場所じゃないのか」

あやめがいる高校は、丸富大学付属高等学校といい大学と高校がいつしよになっている。

「そんなことは、いいから早く来てあと服を持ってきてくれるとありがたい。じゃあ」

「おい！ちよつとまてよ」

服を持ってこいってどういうことだよ。あいつはいま何をしているんだ。

「まあいつか面白そうだし、いつてみるか」

そういつて俺は丸富大学へ向かう。（おもしろ半分に）

「ここか、丸富大学は！」

けっこうでかい校舎がいつぱいあった。

そんなことを考えていると銃声が聞こえた。

「なんだ、ってか何で銃声」

銃声の聞こえた方に行ってみると見たくないものを見てしまった。

パンツ一丁の姿で銃を避けている洋がいた。

「あいつは何をしているんだ。無視してあやめのところでも行こう」

俺は、あやめに電話をかける。

ブルブル

「あやめか、いまお前何所にいるんだよ？」

「いまは丸富大学の部室塔にいるけど」

「ちようどいい、そこどこか教えてくれよ。今から行くから」

「別にいいけど何かあったのか？」とあやめは俺に聞いてくる。

あんなもん見た後、だからなあ。綺麗な物見て落ち着きたいから何て言えないしなあ。

「まあ暇だったからブラブラしてたらここに来たからとでもいっておくよ」

そついうとあやめは「ふううん。わかった」といって道を教えてくれた。

「洋、生きてまた俺たちの元へ帰って来いよ」

俺はそついうとこの場から立ち去った。

「へえここがお前の部活なんだ。ゲームしかおいてねえけどなにやる部活なんだよ」

「ここはゲームやる部活だよ」

いやそのままじゃんか

そんなことを話していると誰かが入ってきた。

「著莪、服を！！」

そんな感じで洋が入ってきた。

「おう、翔太じゃないか。どうして僕より先に著莪の元にいるの」
「それは、お前に呼ばれて丸富大学にきたら、パンツ一丁の変態がいたからこれはまずいと思ってあやめの元に連絡し、ここに来たというわけだ」

「途中で出てきたパンツ一丁の人僕だから」

「知らないよ。俺の友達にパンツ一丁で外を走りまわる人なんていないよ」

そういうと「ひどいよ。僕だって好きで（長いため以下省略）」となんかいろいろいい始めた。

そんな会話をしているとあやめが「まあまあ佐藤落ち着いて。ほら服用意してやったから着替えろ」

「わかったよ。ってここで!!」

「ここ以外着替える場所ないじゃんかよ」

「あやめその発言は如何なものかと思うぞ」

そういうとあやめは「えっ??」といった。

「普通に考えればお前は男の着替えを平気で見られるのか?」

「別に見られるけど。ってか佐藤じゃん最初からパン一状態なんだから関係ないっしょ!」

まあそれもそうだな。

「洋、ここで今すぐ着替えろ」

俺がそういうと洋はふてぶてしく着替え始めた。

「そのかつこは如何なものかと」

俺がそういうとあやめが「まあいいんじゃない」という
良くないだろうドツカラどう見ても変態じゃないか、これならパン一の方がマシだよ。

「著莪なんでこんな服なんだよ!!」

「まあいいじゃんか」

そんなことを話していると扉が開いた、洋は異常にビクッとして

いた。

「あやめちゃん。いいもん持ってきたよ」

そこにはかわいらしい幼児のような子がいた。

「はい、あやめちゃん」

そういうと帽子をあやめに渡しそれを洋にかぶせる。

それはもう何所からどう見ても。変態だ！！

「だめだ、俺はもう耐えられない。先にスーパーに行っている」

そういうとあやめが「今日は東区のスーパーに皆いるから」そういつて俺に地図を渡してきた。

俺は帰り際に扉の前にいた幼児に話をかけた。

「君、名前は？」

「井ノ上 あせび」とかわいらしい声で答えてきた。

「じゃあねえ、あせびちゃん」

そういつて俺は、あせびちゃんの頭を撫でた。

そして扉から出て行き、階段を下りようとした時、一段踏み外し俺は一番下まで落下して行った

「んん・んん・ここは」

気がつくと俺は、誰かの背中の上にいた。

「気がついたか。翔太」

俺をおぶっていたのは、洋だった（変な格好）

「俺に何があっただ？」

「お前は階段の上から下まで綺麗に転がってたんだ」とあやめが説明してくれた。

「もう大丈夫だ」そういつて俺は、洋の背中から降りる。

本音を言うにあやめにおぶってほしかった。俺は何をいっているんだ。

「おっもうついたぞスーパー」

そこは意外と大きな目のスーパーだった。

スーパーの中に入るとまず目に飛び込んできたのが巨体の男だった。

「あいつどこかで、そうだ思い出した、魔女を調べる時に出てきた、魔術師に並ぶ強さを誇る」

「帝王」とあやめがいう、俺のセリフ取られた。

そんなことを話しているとピアスをつけた男がこちらを見ている。すごい視線で。

「まさか、俺がライバルし、していた相手がまさかあんな変態だったとは」

「だっていわれてるよ、変態さん」

「誰が変態だ!!」

そんな風に洋が怒る。

「なあ洋、お前の二つ名こんなどうだ」

洋は、ドキドキしたような目でこちらを見ってくる。

「変態!!」

「まんまじゃないか!!」

「やっぱ認めてるんじゃない」

「そついやーあやめお前も二つ名持ってるだろ?」

俺が言うにあやめは「うん持ってるよ」といつてきた。

やっぱはつきり行って今の声滅茶苦茶かわいい。

「アタシの二つ名は湖の麗人」

湖の麗人なんかかつといいなあ

「まあそんなことよりさあ、もうそろそろ半印証時刻だよ」

「それもそうだしもうそろそろ前の方行くか」

前の方に行くと、白粉と槍水先輩がいた。

「佐藤なんだその格好は?」

まあそりゃあ誰でも最初につこむわなあ。

「予想どうり」

白粉に行つたてはばかなのか。

このスーパールの半額神が姿を現した。

「来たぞこのスーパールの半額神だ」と槍水先輩が言う。

若い・・・しかも女性・・・しかも滅茶苦茶綺麗じゃないですか。

何となくだが洋も同じ事を考えているような。

「佐藤、白粉、烏丸お前達は何を狙う？」

「僕はすきやきを」

「私は勝つドンを」

「俺は天丼を」

「そうか私は、チキンカツカレー弁当を狙おう、せつかくこの店に来たのだからザンギ弁当を狙いたかったが売り切れではしょうがない」

俺はあやめの元に向かう

「お前は、何を狙うんだよ？」

「アタシはすきやきを狙うつもり」

洋といっしょか、まあ頑張れ洋、お前も変態の二つ名を持つ男だ（嘘）。

半額神がシールを貼り終わりゆっくりと扉を閉めてった。

その瞬間いっせいに弁当に群がる狼達。

さて毎度おなじみのあれ言いますか。

「さあ狩りの時間だ」

第3話 湖の麗人（後書き）

次回予告

次回予告を担当する著我 あやめだよ。

ついに本性をむき出した『帝王 モナーク』佐藤を開戦の狼煙にする。とかワケの分からないことを佐藤がやられた時、あの男が暴走し始める。

アンタは向こうで何があつたのさ。

次回 暴走

「かかつてきな、湖の麗人 著我 あやめ様が相手だよ」
ちよつと決めてみた。

第4話 暴走（前書き）

今回ついに翔太が謎の力を使います。それでは第4話 暴走お楽しみ下さい。

第4話 暴走

「さあ狩りの時間だ」

俺はその声と共に半額弁当の元へ行く。

だがやはりその行く手を狼達が邪魔してくる。

「やつぱりこうこなくちゃねえ」

俺はその狼達を倒していく1人、2人、3人と

ちよつと余裕のあつた俺は周りを見渡した。そこには魔女と戦うあやめ、ピアスの男と戦う洋、狼達を潜り抜けて弁当をとった白粉がいた。

「皆頑張ってるな。俺も頑張らないと」

そのとき「佐藤、逃げる！」という声が聞こえた。

「今の声、あやめ？」

後ろを振り返ってみると洋が床に倒れこんでいた。

「洋！！！！」

俺が近寄ろうとすると狼達がいつせいに襲い掛かってくる。

俺は、それに取り押さえられた。

洋は、何者かに首をつかまれていた。

「今宵、お前は歴史に名を刻むことのなる。光栄に思うがいい」
なんのことだよ。歴史意味がわかんねえ。

そうすると洋はかすれた声で「・・・な、に・・・？」

「その血でもって開戦の狼煙となれ」

その男は洋を掴んでいた手を離し、拳を固める。

「やめろ！！！！」

その声は届かずそして俺は動くことも出来ずに見てるしか出来ないのか。

その時、ピアスをつけた男が洋を庇った。

そして洋とそのピアスの男は吹き飛ばされた。

「洋!!!!!!!!!!!!!!」

その瞬間、俺の中の何かが切れた。

槍水 目線

私は弁当を買い佐藤たちの様子になり見に行くと佐藤が倒れていて、烏丸が押さえられていた。

「貴様っ!!」

「うるさいぞ、魔女。静かにしろ。店に迷惑じゃないか」

帝王はニヤつきながら近寄ってくる。

「何故あそこまでやった! 貴様の攻撃は弁当を取るための」

帝王は話の最中、私のつかみ、絞めてきた。そしてそのまま私を持ち上げた。

「犬のような声を荒げるのよ、魔女。礼儀を用いて誇りを懸けよ、それが我々の掟じゃないのか。・・・見すばらしいまねをするなよ」
私は、必死に言おうとするがのどを絞められて呼吸がしにくいためはつきりいえない。

そして帝王がしゃべろうとした時、帝王は真横に吹き飛ばされた。

「何が起きたんだ一体?」

そうするとレジの方から麗人も現れた。

「これは一体どうなってるの?」

帝王を一撃で飛ばすほどの狼がこの中にありえない。そう思っていると帝王が飛んでいったほうと真逆のほうに一人の人がいた。その顔を見て私は驚いた。

「烏丸?!」

そうすると麗人も「翔太?! 翔太なの?」

そこには、すごい視線で帝王を見る烏丸が立っていた。

「いてててて、一体誰だ、俺を飛ばした野郎は」

その瞬間烏丸は、猛スピードで帝王の元へ行く。

「うせろ!!!!!!」

烏丸が放った一撃は帝王の腹に命中

「なめるんじゃねえよ！」といって帝王も殴りにかかる。

「翔太！帝王の攻撃を正面から受けたらダメ」

烏丸は、避けることもなく帝王の拳を片手で止めた。

帝王もさすがに驚き後ろに2、3歩引く、

そうすると烏丸は帝王に向かいに行こうとする。だがそれを麗人が止めた。

「もうやめよう、翔太、元の翔太に戻って」

そう麗人が言うとき烏丸は意識を失ったように麗人に倒れ掛かる。

「まさか魔女の元にそんな奴がいたとはな。少々油断しすぎたようだ。そいつに伝えておけ、「今度は本気だ」と」

そういうとき帝王はスパーから出て行った。

翔太 目線

「こ・・・ここは」

記憶があやふや過ぎるええーとまず洋に呼ばれて丸富大学に行つて

スパーに来て 戦つて 洋がやられて

はああー思い出したまたやつちやったのか。

ところでここは何所だ、休憩所？

まあとりあえず起きるか。起き上がってみると、目の前に笑っているあやめ、不思議そうな顔をして見ている槍水先輩そして服で何かを一生懸命隠している洋

「変態」

そう俺が言うと

「変態とは何だ、第一起きて第一声が変態ってどういうこと」

「しょうがないだろ。だって何か起つてるし」

「いけないで！！！！」

そんな会話をしていると槍水先輩が「もう大丈夫なのか？烏丸は」
「ハイ大丈夫です。どうせダメージ1つ受けてないんでしょ」

そういうと槍水先輩が「まあな」といつてくる。

「とりあえず佐藤何故立てないのだ？」

「大丈夫です。次期に起てる様になります」

「つかある意味もう起ってるじゃないですか？洋

「まあある意味でもうたってるけどね」

「あやめ、女子がそんなこと言っちゃだめだ。洋の顔を見る」

洋はものすごい目であやめを見ている。

そんなことをしていると白粉が来た。

「・・・いや、違うんだ、白粉・・・この状況にはいろいろち理由が」

そんなことを洋がいうと白粉は

「・・・全員男にすれば使えるかな」

「やっぱりこいつは分かん」

「とりあえずみんな落ち着いてきたか？」

槍水先輩がいきなり言い出す。

「烏丸聞きたいことがある」

「はあはい」

「あの力は何なんだ？」

「やっぱり俺は、あの力を使っていたんですねえ」

洋と白粉は何のことみたいな感じになっていた。

「麗人が止めなければ、まずいことになっていた」

「そうだよ、アタシが止めなかったら大変だったんだからねえ」

俺はそういうあやめを抱きしめて「ありがとう」というとあやめは照れながら「ううん」といった。

「それじゃあ、話しますか、この力と俺が何故『狼殺し ウルフス レイヤー』と呼ばれるようになったか」

俺が話し出すと皆が真剣の目で俺を見てきた。

第4話 暴走（後書き）

次回予告

次回予告担当の佐藤 洋と烏丸 翔太です。

今回は洋がなぜ変態と呼ばれたか分かるよ。

ちがう、今回は『狼殺し ウルフスレイヤー』の謎と翔太の力について分かるよ。

次回 狼殺し

それじゃあ決め台詞行きますか。

僕決め台詞ないんだけど。

しょうがない俺のキメ台詞言わせてやるよ。

行くぞ「「さあ狩りの時間だ」」

第5話 狼殺し（前書き）

今回は何故翔太が狼殺しと呼ばれるようになったかについての話です。

それでは第5話 狼殺しお楽しみ下さい。

第5話 狼殺し

1年前のとあるスーパー

俺は、こっちで出来た友達、水川 拓と一緒にスーパーに居た。

「今日も半額弁当取るうな！翔太」

「おう俺たちにかかれば楽勝だ」

その時、俺たちの二つ名は右近・左近と言う二つ名で呼ばれていた。多分この二つ名の意味は、俺たちはいつも二人で弁当を取りに行つてたからつけられた二つ名である。

「いよいよ始まるぞ半値印証時刻が」

「そうだな、拓！」

そんなことを言っていると半額神が現れた。

ここの半額神はスローマンと呼ばれている。その理由は、半額シールを貼るのがものすごく遅くというか動き自体が遅いためその名で呼ばれている。

「スローマン今日も遅いな」

「そうだよなあ」

やっとシールを貼り終わり扉の向こうに行こうとすると、ちらりとこっちを見た。その時スローマンが真つ青な顔をしているのが扉の閉まりかけの隙間から見えたような気がした。

「それじゃあ翔太いつものやつ言うよ」

「わかってるよ」

「さあ狩りの時間だ」

あの時のスローマンの顔はなんだっただ。

狼達は弁当を取るために戦い始める。

俺と拓は、狼達を次々と倒していく。

「翔太、あいつ二つ名持ちだよ。たしか『狂戦士 バーサーカー』の二つ名の持ち主」

『狂戦士 バーサーカー』ここらじゃ有名な二つ名だ。

戦い方がいかれたような戦い型だからその二つ名がついた。

「せっつかくいるんだし相手しない？翔太」

「それもそうだな」

俺たちは『バーサーカー』の元へ向かおうとすると目の前で『バーサーカー』が一瞬でやられた。

「嘘だろ。バーサーカーがやられた」

バーサーカーを倒した男は、倒したにもかかわらずまだ攻撃をやめない。

「おい、お前止めるよ。ここは弁当を取るために戦う場所だ」と拓が言つとその男は

「じゃあお前が満足させてくれるのか」と拓に襲い掛かる。

俺は拓に応援に入る。

「誰だ！貴様は俺はこのガキと戦っているんだ」

「あいにく俺たちの二つ名は2人で1人の二つ名『右近・左近』なんだなあ」

「そうか。それじゃあ2人まとめてかかって来い」

「行くぞ、拓！！」

「おう、翔太」

俺たちはその男に向かい拳を繰り出す。

その攻撃を手で受け止めるとその男はそのまま、俺と拓を持ち上げ空中で投げた。

その後、男は俺たちを殴ろうとするがあいにく拓は空中戦、最強の力を持つ。

そして拓はその男の拳をかわし顔面に向かい蹴りを入れる。

その攻撃にひるんだ男は俺のほうに飛んできた拳を引っ込める。

男は唐突に拓の足を掴みそのまま振り回し始める。

俺はそれを阻止しようと近づくと思わずと吹き飛ばされてしまった。

その後男は、拓の首を絞めてそのまま上に待ち上げる。

「うううう・・・う」と拓がかすれた声で何か言おうとしている。

「しょ・・・しょう・・・しよた・に・・・げろ」

その声はかすれてほとんど聞こえない位の大きさだった。

「やめるー！！！！！！」

俺の声はむなしく何の意味もなかった。

その時、俺の中の何かがぷつりと切れた。

その瞬間、俺は意識を失う。

その後、俺が起きた時には、周りに狼達が倒れていた。

後でそこにいた、狼に話を聞くと俺は、意識を失った後、あの男を
あともう少しまで追い詰めたらしいがそこで倒れたらしくその時に
周りのいた狼も巻き込みながら倒したいったらしくその時俺は、周
りの狼から『狼殺し ウルフスレイヤー』と呼ばれるようになった
らしい。

拓はその時のショックによりスーパーにはこなくなった。

そしてあとで知ったのだが俺らがその時戦った狼は、この地区で最
強とまで呼ばれた狼『絶望 ディスペア』の二つ名を持つ狼だった。

「まあこんな感じで俺が『狼殺し ウルフスレイヤー』と呼ばれる
ようになっ たわけ」

「なんか、翔太も向こうで大変だったんだね」

何かみんなちよつと暗い感じになっている。

「そんな暗くなるなつて」

その後何分か沈黙が続いた。

「俺さあバカだから、拓の奴をスーパーに戻ってこさせられなかった。そしてあいつも倒せなかった。でも今回は違うちゃんとあいつを倒して俺に自信をつける」

そう俺が言つと皆が「はあっ？」見たいな感じになっている。

「だってさあこの状況、あの時に似てるんだもんだからコレを乗り越えれば、拓に一步近ずけるきげするから」

そついうと皆納得した様子になった。

「それじゃあ弁当食べますか」

そついうと皆が「うん」って

まってるよ。拓、必ずお前をもう一度スーパーに連れてきてやる。

そして『ディスプレイ』お前は必ず俺が倒す

第5話 狼殺し（後書き）

次回予告

次回予告担当の白粉です。

今回もすごかったですねえ。

次回はサイトウが次回ついに

次回 訪問者

「サイトウガンバレ」

こんな感じでどうでしょう。

キャラ紹介（前書き）

今回はキャラ紹介をしたいと思います。
次回に訪問者はやりますので。
それではどうぞ。

キャラ紹介

名前：水川 拓

二つ名：『右近・左近』（翔太と2人で）

容姿：前髪は眉毛くらいで後ろ髪は肩くらいにかかっている。基本おとなしい性格をしている。

性格：翔太と同じように誰とでも友達になれる性格で翔太の最初の友達である。

家族：今のところ不明

交友関係：烏丸 翔太 バーサーカー

二つ名の由来：弁当を取る時、翔太と手を組みながら戦っていたため、左・右の名を持つ右近・左近という二つ名になった。

戦闘スタイル：基本拳と足を使うだが翔太と同じようにスーパーにある。物を何でも扱える。

好きなもの：弁当 仲間

嫌いなもの：特になし

現在は、翔太が暴走した日からスーパーには顔を出さなくなったという。

実際何故スーパーに顔を出さなくなったのか不明である。

決め台詞 口癖：「さあ狩りの時間だ」

名前：不明

二つ名：『絶望 ディスペア』

容姿：髪は短く、背は175くらいである。

性格：不明

家族：不明

交友関係：不明

二つ名の由来：そのものと戦ったものは、皆口をそろえてこう言う「地獄を見たようだった」とそのことから『絶望 ディスペア』の二つ名を持つ。この者と戦って無事だったのは今のところ、翔太だけである。

戦闘スタイル：不明（戦ったものが皆話そうとしないから）

好きなもの：不明

嫌いなもの：不明

この者は翔太に怨みを持っており、その理由は、やられたからではないらしい。

キャラ紹介（後書き）

次回予告

次回予告担当の？ハッピーです。（作者）

今回はHP同好会にあの人が来ます。

そしてあの洋と翔太のクラスメイトのあの人がついに降臨する。

次回 訪問者

言ってみたいですよねえこんな言葉

「さあ狩りの時間だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7340z/>

ベン・トー ～狩人の名を持つ狼～

2011年12月26日20時49分発行